

とうに
岩手県釜石市唐丹小・中学校の
子どもたち104人を支援する運動に
2020年まで協力してください

2013年12月、支援者とともに



震災は、そこから何も学ばなければ震災のままだが、
教訓を学び、新しい生き方を生み出し、豊かな社会の創造へ向かえば、
震災は震災でなくなる。
それへ向かってどう生きるのか、震災は私たちに問いかけている。

唐丹の子どもたちを支援する希望基金 2011-2020

岩手県釜石市とうに唐丹小・中学校の 子どもたち104人を支援する運動に 2020年まで協力してください

「唐丹の子どもたちを支援する希望基金 2011～2020」（略称「唐丹希望基金」）は、東日本大震災直後の2011年4月、岩手県盛岡市の隣町、矢巾町に住む高館千枝子の提唱で始まりました。その時の思いを高館は、次のように述べています。

「この度の東日本大震災で裸一貫となった多くの人たちの力になりたいと思い『唐丹の子どもたちを支援する希望基金』を立ち上げました。被災者の顔が見える支援をしたいと思い、これまで個人的に関係のあった釜石市唐丹町とうにちょうという小さな漁村集落を支援することにいたしました。これからの日本を背負ってゆく子どもたちが、震災に負けず真っ直ぐに育って欲しいという気持ちを、『1年間の支援』という形で募金活動を展開していきたいと思います。私のプロジェクトに賛同し、たとえ僅かでも募金にご協力くださることを切にお願いします。私の声を、何とか力になりたいという多くの日本人、あるいは世界の人々に届けて欲しいと思います。公的支援と個々への支援の両面からサポートしていけば、辛い毎日ではありますが、被災者の方々も頑張れるような気がします。是非頑張って生き抜いて欲しいのです。」

支援の対象として選んだ唐丹町は、美しい唐丹湾に面して、ホタテ、ワカメなどの漁業が盛んで、また「さけのふるさと」でもあります。しかし、明治29年と昭和8年の大津波で大きな被害を受け、今回もまた大きな被害を出しました。たとえば、小学校のあった片岸部落は70軒あった家がすべて流され、中学校のある小白浜の部落も、巨大防潮堤が倒され、海寄りにあった家はすべて流されました。唐丹町全体では、亡くなった方19人、行方不明方2人、現在の小学生64人のうち、26人が仮設住宅に住んでいます。学校自体も仮設の校舎です。漁港も、船も、作業所も被害を受けましたから、仕事

を失ったり少なくなったりして、多くの住民が生活上の困難に直面しています。

高館のこの思いは、2011年6月27日の毎日新聞夕刊に載ったことから大きく発展し、1年目（2011年4月1日—2012年3月31日）には、募金総額8,649,003円に達し、これを唐丹小学校と中学校に寄付することが出来ました。これらの寄付金は、当初はお金を直接家庭に渡すという考えでしたが、保護者からの意見で学校に一括寄付しました。2011年は、給食費、教材集金、PTA会費、関連機関への負担金等、あらゆる経費の一切を、学校は集金しなかったようです。また、その年の12月には、各家庭にも生徒1人当たり18,000円の生活支援金を渡しております。

この支援活動は「1年間」ということで始めました。しかし本当に1年で止めて良いのかという問題がありました。当初は1年もあればかなり復興するのではないかという甘い予測もありましたが、実際は、1年経っても復興とは程遠い状況にありましたので、もう1年募金を継続することにして、2年目（2012年4月1日—2013年3月31日まで）には、150万円を寄付することが出来ました。3年目も同様に継続し、2013年12月には、小学校・中学校にそれぞれ50万円ずつ寄付をすることが出来ました。これらの寄付金には、フランスをはじめとする外国からのものも含まれています。

2012年、2013年の寄付金は下のように使われています。

小学校 PTA会費、関連機関の負担金、物品の購入など。

中学校 2012年の支援金50万円・・・生徒1人4,000円を保護者に配布。

体育館で使う合唱用の「2段の台」を購入。

2013年の支援金50万円・・・生徒1人10,000円を保護者に配布予定。

2012年には、3つの部落のワカメ組合にもそれぞれ10万円ずつ、寄付をしています。

何事も始めるときには勢いがありますが、継続するのが次第に困難になります。唐丹への支援はいつまでするのか？これが問題でした。これに結論を出したのが、会員の一人、伊藤富美子さんの高館へのはがきでした。そこにはこうありました。

「唐丹の小中学生のことを毎日考えます。震災の年に入った小学生も、もう3年生です。この子たちが中学を卒業するまで元気でいたいです。」

これを読んで高館は、「唐丹への支援は、この子たちが中学を卒業する2020年まで続ける」と決意し、2013年12月に開かれた支援者の集いでも、この方針が満場一致で承認されました。

2020 年は、東京オリンピックの年です。あと7年。それはオリンピックにとっては、近い未来です。しかし、大震災はどんどん過去になり、歴史の中に埋没してゆきます。2020 年までの唐丹支援活動は、とても集中力のいる困難な日々だと思います。でも、私たちは、これを成し遂げる決意をしました。もちろん、目的は、唐丹の子どもたちの健やかな成長です。震災に負けず、日本を背負う力として育てて行ってほしいのです。

また同時に、この活動は、私たちの生き方を問う活動でもあります。震災や原発事故から何も学ばず、むしろ金儲けの好機ととらえているような人々が政府や財界の中核を占めているように思えます。私たちは、震災を人間性を取り戻す好機としてとらえ、人間らしい社会の建設に進みたいものです。私たちの力は小さくて、大した寄付も支援もできません。しかし、そういう小さな力を結集して、未来を拓くことが出来る、そんな展望を持ちたいものです。皆さん、2020 年まで唐丹へ支援してください。あなた方の周りに、善意の、暖かな輪を大きく広げてください。

2013 年 12 月の唐丹の子どもたち



震災から3か月目の唐丹



2011年8月の片岸部落。左が海で、あまり高くない防潮堤が見える。70軒あった家が全部無くなり、小学校とその体育館だけが残っている。津波は右手の国道を乗り越え、唐丹駅まで侵入した。

今は、学校も取り壊されたので、新しく建てられた作業所のような建物しかない。ここは住宅を建てられない区域に指定され、元の住民は仮設住宅暮らしである。

上の写真も2011年8月撮影。小白浜の防潮堤の内側には、ぺちゃんこになった車が並べられていた。

代表・高館千枝子からの訴え

「唐丹の子どもたちを支援する希望基金 2011～2020」は、2011.3.11の惨事を忘れてはいけない、全てを失った故郷を、忍耐と努力、あらゆる英知と精神力で復興させるのは、未来の若者たち、その未来を託す子どもたちに元気に育って欲しい、そのために支援しよう、と心から思う方たちによって支えられています。

2012年からの実質的支援者は30人にも満たない僅かな人数ですが、それでも延べ515人（2012年312人、2013年12月現在203人）、少人数でも思いは固く、強い絆の輪に育ちました。2011年3月11日以前は全くの他人、会って話をする事などあり得ないことでしたが、「唐丹希望基金」支援者になることで、お互いに顔を合わせ、一年に一度、唐丹町を訪問し、子どもたちと出会う機会が与えられました。

東日本大震災は、人の生き方を問い続けています。真の生き方を。

1. あなたは、目の前の惨事を心から悼み、共存社会を創る一員になれますか？
2. あなたは、社会の一員としてどんな行動がとれますか？
3. あなたは、主体的な人生の創造のため、他者に対しどのような行動がとれますか？

私は、あの時から、一生問い続けることを誓いました。

「真実を生きるただの人になりたい。」

これは、私の人生の指針であり、道しるべでもあります。小さき群れ「唐丹希望基金」に加わる方が1人でも2人でも増えることを願って止みません。ただただ、

「唐丹小・中学校に、教育支援金を少しでも多く届けたい！」

「子どもたちの保護者の負担を、出来るだけ軽くしたい！」

この一念のためです。

お金以上に大切なものは沢山あります。それらは、子どもたちを深く知り、心から愛して止まない家庭や学校、地域の思いの中で育まれていくことでしょう！そのためにも、「唐丹希望基金」を出来るだけ長く存続させたいのです。

私の喜びは、一年に一度、唐丹の子どもたちと交流できる機会が与えられる幸せです。このような出会いは、被災地の至る所で生まれています。私もその中の一人に加えていただけることに感謝しなければなりません。

2020年3月、唐丹中学校卒業式に参列させていただき、子どもたちの門出を祝福し、「唐丹希望基金」の幕を閉じます。多くの方たちと一緒に進んでいきたいと心から願います。それまで「唐丹希望基金」へ募金をお願いします。

「唐丹の子どもたちを支援する希望基金 2011～2020」

- 名称** 「唐丹の子どもたちを支援する希望基金 2011～2020」(「唐丹希望基金」)
- 活動期間** 2011年4月から2020年3月
- 支援対象** 唐丹小中学生104人(小学生64人、中学生40人)と山田尊喜^{と き き}ちゃん
- 活動内容**
- ・唐丹の小・中学生への教育支援
 - ・「唐丹小・中学生と支援者の集い」開催
 - ・山田尊喜ちゃんへの医療支援
 - * 尊喜ちゃんの両親は唐丹出身。尊喜ちゃんには障害があり、祖父母が支援していたが、震災でそれが出来なくなったので、小・中学生への支援とは別枠で支援することにした。
 - ・「『鎮魂の歌』を歌おう」参加者1万人を募る運動
 - * 震災を忘れないための「歌声運動」で、『鎮魂の歌』関係の資料は <http://www8.ocn.ne.jp/~eec/company.html>
- 広報活動** 毎月末発行の「EEC通信」に、子どもたちの声、学校の様子、募金者名、応援メッセージ、募金収支報告(年1回)などを掲載する。
- * 「EEC通信」は <http://www8.ocn.ne.jp/~eec/index.html>
- 支援金振込先** ゆうちょ銀行総合口座 記号:18390 番号:13087781 高館千枝子宛
- 役員**
- 代表** 高館千枝子
- 委員** 長谷川(間瀬)恵美(桜美林大学准教授)
キャロル・サック(日本福音ルーテル社団ハーブ奏者、アメリカ人)
堀泰雄(関東支部代表、エスペラント語作家)
高橋則子(会計監査、EEC東京支部代表)
千田あかね(広報担当、EEC金沢支部代表)
マリー・ホルテンセ(フランス・マルセーユの小学校教師)
- 「『鎮魂の歌』を歌おう」推進委員** 牧野 三男(横浜エスペラント会)
嶋澤 純子(京都キンコー楽器内)
- 事務局** 〒028-3603 岩手県紫波郡矢巾町西徳田7-7 高館千枝子方
Tel/Fax:(+81)019-697-3851
メール:tchieko@cocoa.ocn.ne.jp ホームページ:<http://www8.ocn.ne.jp/~eec/>

震災から3か月目の唐丹



2011年8月、高さ14メートルの巨大防潮堤も倒れたまま（小白浜）。



2011年8月、唐丹中学校。体育館を仕切って4教室3つと職員室が作ってあった。寒いし、暑いし、うるさいし、大変だったろう。それでも子どもたちは、校訓の「不撓不屈」を胸に頑張っていた。壁には全国からの激励メッセージが所狭しと貼ってあった。

唐丹小学校は、仮設校舎ができるまで、別の小学校に間借りしていた。

多大な支援をいただき本当にありがとうございます。皆さまのご支援のおかげで不自由のない生活をおくれています。私は部活を頑張っています。今体育館を教室にしています。大震災にあいましたがみんな元気で暮らしています。

2011年5月31日 中学1年女子生徒

2012年3月、中学最後の学年を震災の中で過ごした子どもたちの卒業式。「学校も、家族も、家も、当然明日もあるものと思っていたが、そうでないことに気づいた」とお母さんが謝辞で話していた。

2012年6月、笑顔が戻ったよ。

多大な支援をいただき本当にありがとうございます。今回の震災で、使い慣れた道具が流されましたが、皆さんのおかげで楽しく野球をやっています。僕の家は震災で流されました。でも今は前向きに考えていきたいと思います。

2011年5月31日 中学1年男子生徒



唐丹と津波

明治29年と昭和8年の大津波

唐丹は、すでに何回も津波に襲われていた。「三陸海岸大津波」(吉村昭著 文春文庫)には、次のように唐丹の名前が出てくる。

明治29年の津波 高さ、唐丹村小白浜 16.7メートル(右は、明治の津波を描いた錦絵)

昭和8年の津波

唐丹村本郷は完全な壊滅状態に陥り、全戸数101戸中実に100戸が流失した。死者も多く、全人口620人中、326人が死亡、21人が傷ついた。(写真は、唐丹町小白浜盛巖寺にある記念碑。「大津波くぐりてめげぬ雄心もていざ追ひ進み参る上がらまし」と刻まれている)



「津波の町に生きる」(北原耕也著 本の泉社)

明治三陸地震津波 死者1684人(津波前全人口 2535)

唐丹も小白浜尋常小学校では、全校児童 85 人中 60 人が死亡し、唐丹尋常小学校では全校児童 115 人中実に 112 人が死亡した。

昭和三陸地震津波 死者 359 人（津波前人口 3694 人）

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災

そして今回の大津波である。中学のある小白浜には大きな防潮堤がある。この防潮堤は、昭和 54 年～平成 2 年にかけて 10 億 4200 万円で建設され、長さ 420 メートル、高さ 14 メートルである。防潮堤のそばに「浪を砕き郷を護る」という当時の知事が揮毫した記念碑があったが、今回の大津波は、この防潮堤を乗り越え、部分的に押し倒して、部落の下半分を壊滅させた。また小学校のあった片岸部落は、津波が防潮堤を乗り越え 70 軒あった家屋をすべて押し流し、後に残ったのは 3 階まで浸水した小学校の建物だけであった。唐丹町の浸水面積は 97 ㍊、亡くなった方 19 人（うち中学生が 1 人）、行方の分からない方 2 人、住宅被害 343 戸（唐丹町全体の 36%）である。

唐丹小学校の子どもたちの現状

1) 小学生 64 人の家庭の状況 (2013 年 12 月現在)

自宅被災	29 人
学区外登校	9 人
仮設住宅	25 人
バス通学	35 人
学童保育	25 人
準要保護	28 人
不登校	0 人

2) 児童の状況

- ・欠席が少ない、元気、明るい。



- ・校庭がないことや遊具がないことからのストレス、肥満の増加傾向。

2012年5月、小中合同運動会

- ・バスで帰る子どもが多く、学校で遊んだりする時間が取れない。
- ・家を建てた家庭の子どもと建てられない家庭の子どもの差の問題。
- ・2015年度には、小学校に入学する子どもが4人に減りそうだという少子化の問題。



3) 学校の対応

- ・心のケアのためにスクール・カウンセラーに来てもらっている。
- ・職員定数13人のところ、復興加配で2人、市の学習補助で1人の教員が加配。
- ・今後、震災を知らない子ども、教師が入ってくることへの対応が課題。
- ・仮設の校舎に痛みが出てきている。市の計画では、平成27年4月に新しい校舎が完成することになっている。

4) 保護者の学校評価アンケートから

- ①あてはまる ②どちらかと言えばあてはまる
③どちらかと言えばあてはまらない ④あてはまらない

- 1) 子どもが生き生きと学校生活を送っていると感じる ①76% ②22% ③2% ④0%
2) 子どもは自分の学級(学校)が楽しいと言っている ①68% ②25% ③5% ④2%
3) 子どもは授業の内容をよく理解していると感じている ①47% ②47% ③3% ④3%

学校では、「仮設校舎で2年目を迎えたが、『子どもたちが生き生きと学校生活を送っている』の①②の合計が98%になっているのは「うれしい」と評価している。

復興へ頑張る気持ち



2012年6月、目標に向かって頑張るぞ。

「自ら準備・片づけをする」「進んで勉強する」「今よりももっと上手になれるよう一日一日の練習を大切にする」「早寝早起きをきちんとして生活のリズムを整える」「中学校の授業のスピードについていけるように、予習・復習をする」「上級生と自然に話せるようになる」などなど。

2012年12月、仮設校舎建設中。左が小学校、右が中学校。 2013年末、仮設の校舎は「カビが出た」「床がぺこぺこになった」などの支障が出ていた。2015年4月に、仮設校舎の裏側に新校舎が完成する計画になっている。早くできてほしいな。

唐丹中学校父母からの手紙

2012年3月。左の太陽の中には子どもたちの顔写真、虹は手形で出来ている。

2014年1月に、中学校から「父母の手紙」が送られてきました。手紙には、「支援金への感謝」と子どもたちの状況などが、次のように書いてありました。

1. 現在子どもが力を入れていること：生徒会活動、クラブ活動、勉強

2. 将来は何になりたいか：家庭科関係、動物関係、考古学、薬剤師、看護師、
保育士、美容師、自衛隊員

3. 被害状況

- 1) 自宅再建ができない。
- 2) 子どもが一時期登校拒否になった。
- 3) 家を失った。

4. 今の気持ち

- 1) ご助力に支えられてたくましく成長してゆくわが子を見て、親としての喜びをかみしめています。親も子も一緒に成長したいです。
- 2) 子どもが薬剤師、看護師になりたいというのは、皆様の支援を受けて育つ子どもたちがいつか誰かのために役立つことをしてほしい、という親の気持ちを受け止めたのだと思っています。
- 3) 自宅再建ができない不便な生活環境の中でつらい経験をしましたが、夢を持ってほしい。
- 4) 全国の方々からご支援をいただいたことに感謝する気持ちを忘れずに、人のために行動できる優しい人になってほしい。
- 5) 月日が経つにつれて、被災地にいる私たちも震災当時の記憶が薄れつつあります。自然災害の恐ろしさを体験した私たちではありますが、唐丹の美しく恵まれた自然に感謝することを忘れずに、毎日の生活を充実させ、親子で地域のためにできることに取り組んでまいりたいと思います。
- 6) 当時1年生だった子どもは、特に心の傷はないようで、毎日元気に通っています。子どもたちが元気に学校に通っていること、好きなことができること、生きていること、本当に周りにいる全ての人々に感謝しております。
- 7) 子どもは、震災を経験し、人のためになる仕事をしたいと、今は自衛隊員になることが夢のようです。釜石の未来のため、唐丹の未来のため、自分の夢に向かって進んで行ってほしいと思います。
- 8) あの大震災が遠い昔のように忘れられているのではないかと感じる中で、毎年気にかけてもらって、うれしく心強いです。
- 9) 12月8日に、「釜石の第九」に、全校生徒とPTA、そして地域の方々にも参加していただき、感動を届けることができ、その上、子どもと一緒に夢中になり、

親子の絆が深まり貴重な体験ができました。

- 1 0) 唐丹も子どもが減っていて、少人数での指導を受けられる利点もありますが、すべての行事に全員で取り組まなければならない困難もあります。広い校庭でのびのびと走り回ることもできず、子どもが抱えるストレスはかなりのものかと少々心配になります。ハーブのコンサートで、心を癒すひと時を過ごさせていただき、ありがたく思っています。
- 1 1) 息子には元気に学校に通い、未来を切り開いて行ってほしいと願っています。
- 1 2) 中学2年の娘は、美容師になりたいと毎日の勉強、部活を頑張っています。
- 1 3) 私たちは、津波で学校や家を流されました。命が助かったことを一番喜ぼうと思いつつも、娘が大切にしていたものがなくなったこと、鉛筆やノートさえもないことがかわいそうでした。会ったこともない全国の方々からの大切なお金や物資が次々と送られてきて、震災から3年経っても支援の輪が続いていることに本当に感謝しております。
- 1 4) 娘は中学1年ですが、将来はひとの痛みのわかるやさしい子供に育てたいと思っています。
- 1 5) 言葉で言い表せないほど感謝、感謝の気持ちでいっぱいです。今後私たち親子にとって一生忘れてはならない人の恩に報いるよう心を引き締めて頑張っていくつもりでございます。
- 1 6) 頑張っている子どもの姿を見て、親の方が元気をもらっている日々を過ごしています。
- 1 7) 私たち保護者は、支援への感謝の気持ちを忘れず、地域の復興、子どもたちの未来のために尽力していきますので、今後も、暖かく見守っていただければと思います。
- 1 8) このご恩を忘れることなく、いつか何らかの形でお返しできる日が来ることを願い、感謝の心を持ち、一日一日を大切に子どもと過ごしていきたいと思っております。
- 1 9) このたびの震災でたくさんの大切なものを失いました。しかしこの震災でたくさん教えてもらったこともあります。子どもたちにもこの震災を忘れず、心に残してほしいです。

頑張ろう唐丹中 5つの誓い

「口」は、人を励ます言葉や感謝の言葉を使うために使おう。

「耳」は、人の言葉を最後まで聴いてあげるために使おう。

「目」は、人の良いところを見るために使おう。

「手足」は、人を助けるために使おう。

「心」は、人の痛みがわかるために使おう。

私は震災で家がなくなってしまいました。それで今はアパートに住んでいます。ほとんど物がなくて大変だったけれど、皆さんから文房具などを支援していただき助かりました。支援してくださる方のためにも頑張りたいと思います。

2011年5月31日 中学1年女子生徒

外国からも支援が



2012年12月、「唐丹サンタルチア ハープ・コンサート」で、手の写真は、フランスの小学校からの贈り物。（手紙はエスペラント語で書いてある）

唐丹町本郷地区に立つ「伝えつなぐ大津波」の碑。2011年に在籍の唐丹の小学3年生から中学3年生までの子どもたちの言葉が彫られている。隣には、明治の大津波、昭和の大津波の碑もある。

『唐丹希望基金』への訴え

発行：2014年2月 編集：堀泰雄

発行者：「唐丹希望基金」〒028-3603 岩手県
紫波郡矢巾町西徳田7-7 高館千枝子方

Tel/Fax：(+81) 019-697-3851

メール：tchieko@cocoa.ocn.ne.jp

ホームページ：<http://www8.ocn.ne.jp/~eec/>